

成果報告書

I. 研究概要

氏名	田口直子
所属	カーネギーメロン大学
招聘回（招聘期間）	2012年4月1日～9月30日
招聘研究テーマ	日本語学習者のプラグマティクス能力の発達過程の調査
研究目的	本研究では留学生のプラグマティクス能力の習得について検証した。プラグマティクス能力の一指標としてスピーチスタイル（普通体と丁寧体）の使い分けに焦点をあて、留学生が日本に滞在している間にどの程度スピーチスタイルを習得できるか、習得に個人差はあるか、また留学経験が習得にどのような影響をあたえているかを、テスト、アンケート、インタビューなどの質的、量的なデータを集めて検証した。

研究概要：調査協力者は早稲田大学の日本語教育センターで日本語を学んでいる留学生20名であった。スピーチスタイルの使い分けを調査するため、学習者にスピーキングテスト二つを学期の初めと終わりの2回に渡って受けてもらった。一つ目は口頭版談話完了テストで、学習者はシナリオを読み、そのシナリオの人物になったものと仮定して発話した。シナリオは、「フォーマルなあらたまった場面」と「インフォーマルでくだけた場面」の設定があり、「依頼」や「謝罪」などのスピーチアクトを単位とし、それぞれの場面で適切なスピーチスタイルを使うことが要求された。学習者の発話は日本語母語話者2名が、スピーチスタイルの使い方が適切、かつ正確にできているかを6段階で評価した。二つ目のテストは会話テストで、学習者同士がペアになり、日本での留学経験について20分程度自由に話し合った。スピーチは全て録音文字化し、普通体と丁寧体を適切にかつ正確に使用しているかを分析した。特に発話末の形式（丁寧体、普通体、中途終了形の割合）、普通体を使う動機、また情意を伴う普通体の使用の有無を調べ、一学期を経てそれらにどのような変化があるかを調査した。最後に、スピーチスタイルの習得に影響を与えていると思われる要因について調査するため、アンケートやインタビューを通して学習者の留学経験に関するデータを収集した。要因として、日本語を使用した時間（日本語接触時間）と異文化適応性の2つをアンケートを用いて計り、スピーチスタイルの変化との関連性を調べた。その他に8名の学生に関しては5週間ごとにインタビューを行った（計3回）。インタビューのトピックは、日本語学習と日本語能力、地域での交流とネットワーク、留学の満足度、異文化適応能力などであった。

談話完了テストの結果： プリテストの点数は6割強であったが、ポストテストの点数は8割強まで伸びた。T-test 検定の結果、点数の違いには有為差があった。[$t=8.65, p<.0001$] よって、一学期間の日本滞在後、学習者はフォーマル／インフォーマルの場面に応じたスピーチスタイルを使って、適切なレベルの丁寧さと率直さを持ってスピーチアクトを発話する力が伸びたと言える。留学初期は場面とスピーチスタイルがちぐはぐな発話や、同じ場面で普通体と丁寧体が不自然に混合している発話が多く見られたが、ポストテストではそのような発話は減った。また発話に終助詞やディスコースマーカを付け加えて口語的な要素を出したり、一辺倒な決まり文句だけでなく様々なストラテジーを使ったりと、よりクリエイティブな発話が増えた。

会話テストの結果： 留学初期は普通体と丁寧体がほぼ同じ割合で会話のほとんどを占めたが、一学期後には普通体が基本スタイルになり（全体の約7割）、丁寧体が3分の1に減り、その代わりに中途終了形が3倍に増えた。文末表現のエラーの割合がプリテストとポストテストともに少なく3～6%であったことも考えると、学生は一学期の間にカジュアルな会話という場面に合わせて普通体を基本形として使うことができるようになったのと同時に、文末未完形をスピーチフォームのレパートリーに加え、コミュニケーションの中で自発的に使うようになったということが分かる。また普通体の機能に関しても、普通体を情報提示、感情表現、問いや問いへの返答、共同発話などの様々な目的で使用していたが、ポストテストではその機能の幅がさらに広がり、相手へのアドバイスや依頼、トピック転換などの言語行為にも普通体を用いていることが分かった。また、もう一つ目立った変化とし

て共同発話のための普通体や普通体を使った「倒置」の文型がポストテストで増えた。このように中途終了形の増加、共同発話や倒置のための普通体使用の増加を合わせて考えると、学生の一学期間の伸びは、単にスピーチスタイルの伸びに集約されるものではなく、インタラクション能力の伸びを示唆するものであると考えられる。

スピーチスタイルの使い分けの変化と日本語接触量、異文化適応性との関連: 学習者の日本語接触時間と談話完了テストのスコアとの相関を、プリテストのスコアを covariate とした partial correlation を使って調べた。その結果これらの変数には相関関係がないことが分かった [$r = .102, p = .68$]。次に、異文化適応性に関しては、談話完了テストのポストテストのスコアと異文化適応性の領域の一つ「知覚的鋭敏性」との間に相関関係が見られた。 [$r = .505, p = .028$] 従って、自分の環境の様々な側面に注意を向けて行動する力は、場面に適切なレベルの率直さ、丁寧さ、明確さをもってスピーチアクト行う力と関連があると言える。

スピーチスタイルの使い分けの変化と日本での経験との関連: 論文ではあまり伸びがみられなかった学習者 S (フランス人、男性) と、大きな伸びが確認された学習者 L (中国人、女性) のケースを描写した。S は多言語、多文化を経験し、日本への興味も非常に高く、日本人と交流したいという意志を強く持っていたが、結局日本人とのネットワークを確立することができず日本語を使う時間も少なかった。反対に L は日本人との交流に S ほど意気込みを持ってはいなかったが、留学中様々なネットワークを構築し、日本語を使う機会を多く得た。日本語でのコミュニケーションがプラグマティクス能力発達の条件となっているのは明らかだが、そのようなコミュニケーションの機会を得る場として、何らかの目的を共にして集まり、活動するグループ、コミュニティの存在があった。この二人のコミュニティへの参加の仕方の違いは、S が放浪型でグループを次々と渡り歩いていたのに対して、L は持続定着型で、一つのグループに腰を据え継続した活動を行っていたということであった。その結果それぞれのコミュニティの中で人間関係を築きそれを発展させることができた。またそのコミュニティには同世代の友達、先輩と後輩、上司と従業員など全く違う人間関係が存在したため、普通体や丁寧体、敬語など異なったスピーチスタイルを体験することができた。このように見ると、持続、定着型のコミュニティや人間関係の構築が、プラグマティクス能力の向上に影響を与える要素の一つであったのではないかと考えられる。

展望: 本研究ではスピーチスタイルの使い分けの変化を追跡しその様相を明らかにした。談話完了テストの発話の変化、文末スタイルの割合の変化、丁寧体を使う動機の変化など様々な面から変化をとらえることにより、スピーチスタイルの使い分けが上手になるというのはどのようなことを意味するのかという疑問に答え、上達の目安となる指標作りに一石を投じることができたように思う。今後の展望としては、この指標の信頼性を高めるため、より多くの学習者を対象にして研究を続けることが必要である。また、指標として中途終了形の割合や共同発話の割合などに増加が見られたが、その増加率は非常に小さいものであったので、今後は 1 ~ 2 年の長期間に渡って調査をすることが必要であろう。またスピーチスタイルに関して最も大切なことはその流動性であるが、今回の研究ではその流動性に対応する力まで推し量ることはできなかった。スピーチスタイルは場に固定されたものではなく、同じ場面でも会話の流れや展開、話し手の心情や心的距離の変化、話題の共有化など様々な要因が絡んで丁寧体から普通体に変化したり、両スタイルが混合したりする。談話完了テストでは場面が独立していたため個々の場面の中に流動性をもたせることは出来なかった。また会話テストも 20 分と短く本当の意味での自然な会話ではなかったので、人間関係や心的距離などに変化をもたせることができなかった。今後はいかにして、学習者から、瞬時に変化していく会話の中で、適切なスピーチスタイルをもって機敏に対応する力を引き出すことができるかが大きな課題である。最後に今回の調査では持続定着型のコミュニティがスピーチスタイルの習得に影響を与える要因の一つとして浮かび上がってきたが、今後はそれを一つの仮説として検証し、その要因や背景についてさらに理解を深めることが必要であろう。